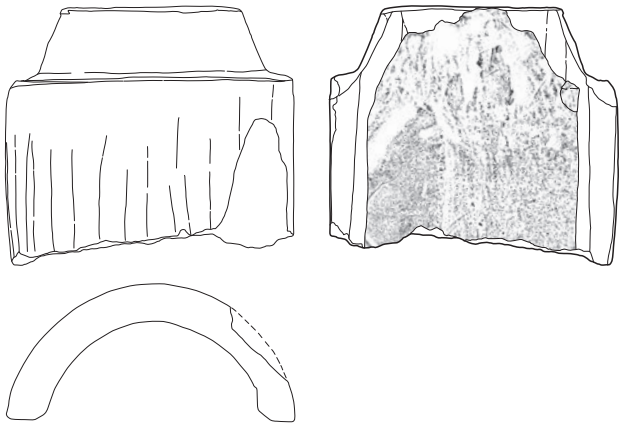
南島原市文化財調査報告書　第34集

常光寺前駅西側遺跡

―北岡地区農道整備工事に伴う発掘調査―



２０２４

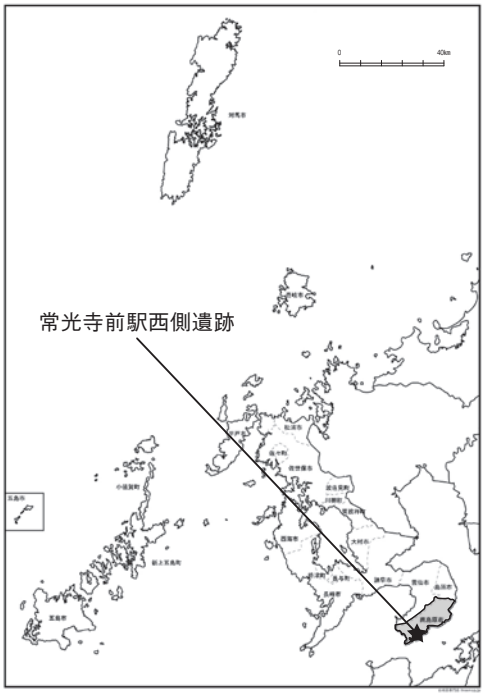
長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書　第34集

常光寺前駅西側遺跡

（じょうこうじまええきにしがわいせき）

―北岡地区農道整備工事に伴う発掘調査―



２０２４

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、北岡地区農道整備工事に伴う常光寺前駅西側遺跡の発掘調査報告書です。

常光寺前駅西側遺跡は旧島原鉄道「常光寺前駅」の西側に位置します。周辺は水田が広がり、四季を通じてとても美しい光景をみることができます。駅や遺跡の名前となった「常光寺」も当遺跡の西側に位置しております。

調査地点は、旧島原鉄道常光寺前駅の西側にあたり、近くには「瓦焼」という大変興味深い地名もあります。調査の結果、鎌倉時代の柱穴や溝状遺構が確認されるとともに、中国産の焼物も併せて出土しました。中国産の焼物の出土は、この一帯が交易を行った場所であることを意味しており、当地の先進性をうかがい知ることができる資料と言えるでしょう。

また、瓦の出土も確認されました。先ほど申し上げたとおり、近くに「瓦焼」の地名があることから、日野江城跡や原城跡の屋根へ葺かれたかもしれません。

最後に、ご協力いただいた関係者のみなさまにお礼を申し上げるとともに、今回の発掘調査成果が学術資料ならびに歴史教材として活用され、文化財保護の一助となることを祈念して発刊のあいさつといたします。

令和６年１月31日

南島原市教育委員会

教育長　松本　弘明

例　言

1　本書は、常光寺前駅西側遺跡（長崎県南島原市南有馬町所在）の発掘調査報告書である。

2　調査は、南島原市が事業主体である北岡地区農道整備工事に伴って実施した。

3　調査は、長崎県南島原市教育委員会が主体となって以下の期間で実施した。
範囲確認調査　　令和３年11月１日～令和３年12月21日　（調査坑９箇所　35㎡）

本　調　査　　令和４年５月16日～令和４年６月８日　（調査面積　　60㎡）

4　現地調査および本書作成にかかわる整理調査の体制と担当は、以下のとおりである。
調査体制

南島原市教育委員会	教育長	永田　良二（～令和３年８月）
	教育長	松本　弘明（令和３年８月～）
	教育次長	栗田　一政（～令和３年度）
	教育次長	五島　裕一（令和４年度～）
文化財課	課長	岡野　博明（～令和３年度）
	課長	中村　隆敏（令和４年度～）
文化財班	班長	梶原　知治
	副参事	伊藤　健司
	副参事	東　貴之

調査担当

範囲確認調査	副参事	伊藤　健司（学芸員）
本調査・整理調査	副参事	東　貴之（学芸員）

5　範囲確認調査における写真撮影、調査坑配置図および土層実測図は、伊藤が作成した。

6　本調査における写真撮影及び個別遺構実測図の作成は、東が行った。また、遺構配置図および土層実測図の作成は、㈱九州文化財研究所に委託した。

7　遺物の整理全般は飛永弘恵の協力を得た。実測および拓本は、㈱九州文化財研究所に委託を行った。心よりお礼を申し上げます。
また、遺物の写真撮影は、東が行った。

8　本書に関する遺物・図面・写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室において保管している。

9　本書の執筆・編集は、東による。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第Ⅱ章　範囲確認調査……3

第Ⅲ章　本調査……6
　第１節　調査の概要……6
　第２節　基本土層……6
　第３節　遺構……11
　第４節　遺物……13

第Ⅳ章　まとめ……21
　第１節　出土遺構について……21
　第２節　出土遺物について……21
　第３節　「瓦焼」の地名について……23

挿図目次

第１図　常光寺前駅西側遺跡位置図……1
第２図　常光寺前駅西側遺跡および周辺遺跡地図（S=1/25000）……2
第３図　TP.7およびTP.8平面図・土層断面図（S=1/40）……3
第４図　令和３年度範囲確認調査調査坑配置図（S=1/1000）……4
第５図　北岡地区農道整備工事地図（S=1/250）……5
第６図　調査区設定図（S=1/200）……7
第７図　北側調査区東壁土層断面図（S=1/80）……8
第８図　南側調査区西壁土層断面図（S=1/80）……8
第９図　遺構配置図（S=1/80）……10
第10図　個別遺構平面図および断面図（S=1/40）……12
第11図　出土遺物①（S=1/2）……14
第12図　出土遺物②（S=1/2）……15
第13図　出土遺物③（S=2/3）……16
第14図　出土遺物④（S=1/2）……17
第15図　出土遺物⑤（S=1/2）……18

第16図　出土遺物⑥（S=2/3）……19
第17図　出土遺物⑦（S=2/3）……19
第18図　出土土師皿①（S=1/2）……22
第19図　出土土師皿②（S=1/2）……22
第20図　出土青磁碗（S=2/3）……23
第21図　調査地点および瓦焼地名配置図　……24

表 目 次

第１表　範囲確認調査および本調査（北側調査区・南側調査区）土層柱状図……９

第２表　出土遺物観察表……20

図版目次

図版１　航空写真および範囲確認調査①……27
図版２　範囲確認調査②および本調査①……28
図版３　本調査②……29
図版４　本調査③……30
図版５　本調査④……31
図版６　本調査⑤……32
図版７　出土遺物①……33
図版８　出土遺物②……34
図版９　出土遺物③……35
図版10　出土遺物④……36

第Ⅰ章　はじめに

第１節　地理的環境

南島原市は、長崎県の南部、島原半島の南側に位置する。北は島原市、西は雲仙市、東は有明海に面しており、当市を含む島原半島は、海に囲まれた美しい海岸線が広がっている。また、美しい自然景観も点在しており、平成新山（標高1483m）や普賢岳（標高1359m）を中心とした温泉岳は古くからの観光地としても知られている。気候は夏は暑く、冬は比較的寒冷といえるが、一年を通じて穏やかな気候であることから観光客にとって訪れやすい場所ともいえよう。

産業は農業と漁業が盛んである。農業は一年を通じて、米や野菜・フルーツを中心とした栽培が行われている。漁業は豊かな海として知られる有明海を漁場としており、農業と同様、当市の重要な基幹産業の一つである。水揚げされた新鮮な海産物は地元料理にも多く取り入れられている。

第１図　常光寺前駅西側遺跡位置図

第２節　歴史的環境

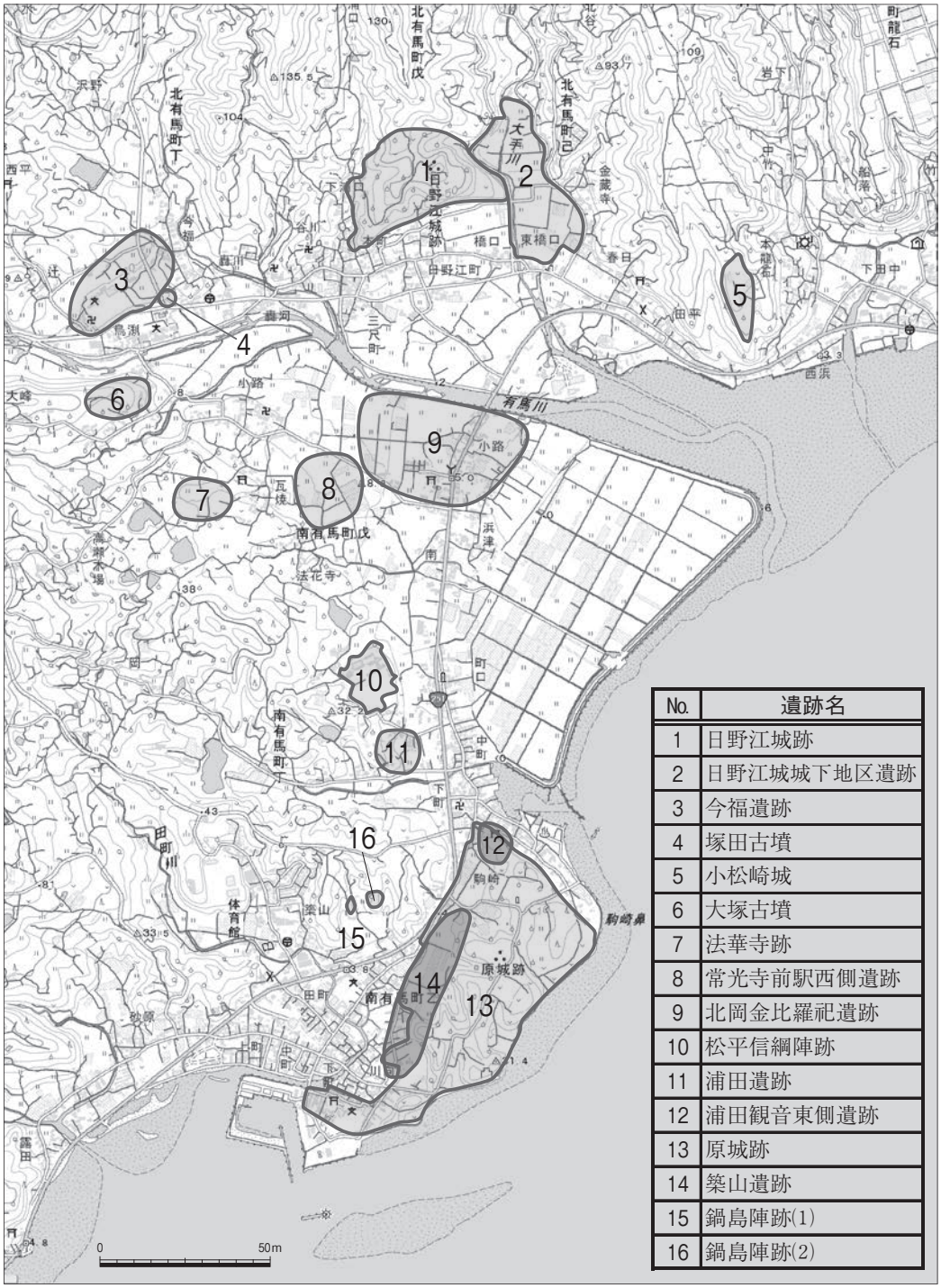
今回、調査した遺跡は「常光寺前駅西側遺跡」であるが、遺跡名は旧島原鉄道の「常光寺前駅」の西側で遺物が採集されたことからその名がつけられている。駅は1926（大正15）年に口之津鉄道の駅として開業、その後、島原鉄道の駅となった。多くの人たちが当駅を利用してきたが、2008（平成20）年に島原外港－加津佐間の廃線に伴い、80数年の歴史に幕を閉じている。駅の西側には駅名や遺跡名にもなった「常光寺」が位置する。

遺跡の周辺には「北岡金比羅祀遺跡」が存在する。この地は明治時代に道路（現在の国道251号）

敷設の際に多くの土砂が削り取られ、そこから多くの埋葬施設が確認されたといわれる。1979（昭和54）年、圃場整備に伴う調査では、南有馬町教育委員会が主体となって古田正隆が調査を担当した。調査の結果、甕棺や土坑墓などの埋葬施設が確認された。

【参考文献】

古田正隆 1981『北岡金比羅祀遺跡 －圃場整備に伴なった調書－』南有馬町文化財調査報告書第１集 南有馬町教育委員会

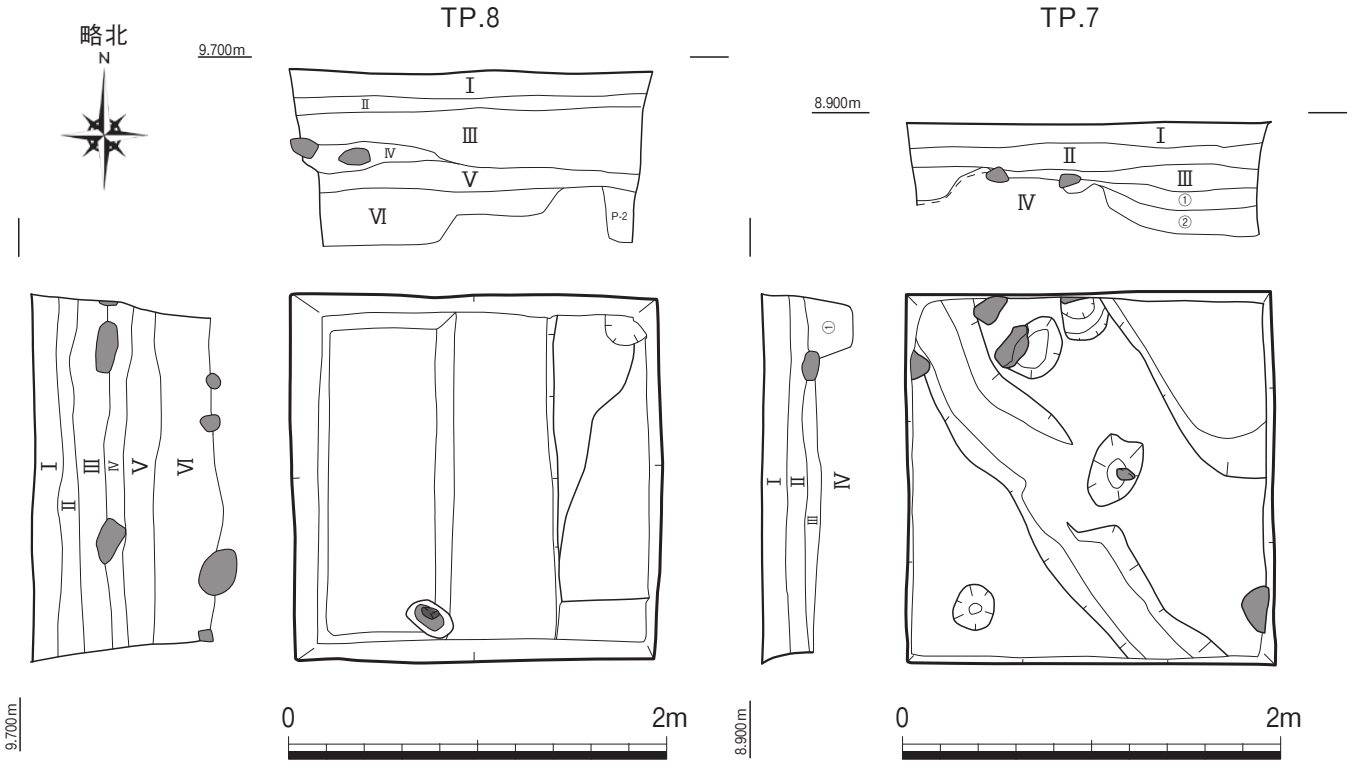


No.	遺跡名
1	日野江城跡
2	日野江城城下地区遺跡
3	今福遺跡
4	塚田古墳
5	小松崎城
6	大塚古墳
7	法華寺跡
8	常光寺前駅西側遺跡
9	北岡金比羅祀遺跡
10	松平信綱陣跡
11	浦田遺跡
12	浦田観音東側遺跡
13	原城跡
14	築山遺跡
15	鍋島陣跡(1)
16	鍋島陣跡(2)

第２図　常光寺前駅西側遺跡および周辺遺跡地図（S=1/25000）

第Ⅱ章　範囲確認調査

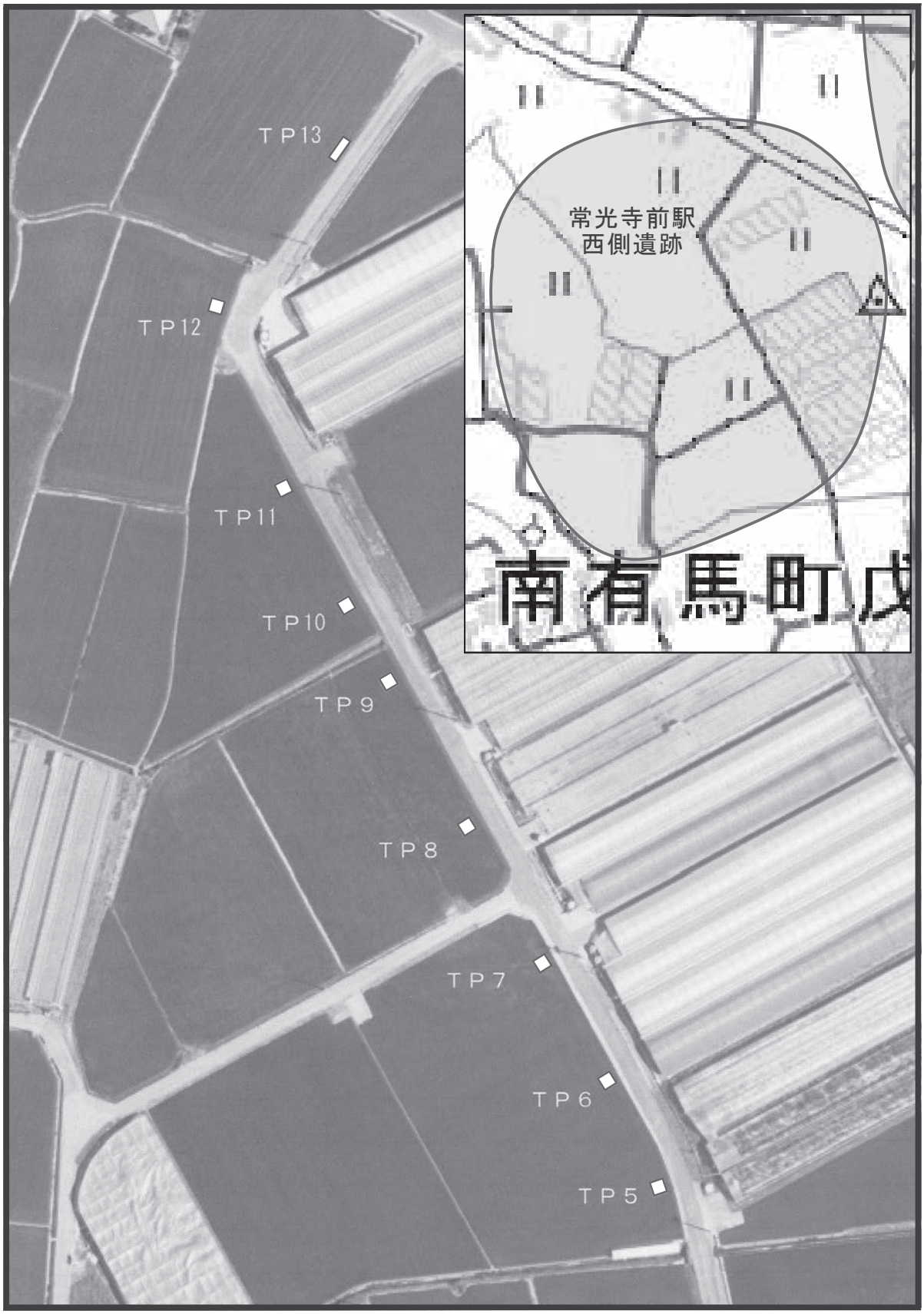
南島原市南有馬町内の北岡地区で農道の整備工事が計画された。しかし、計画路線の一部が常光寺前駅西側遺跡内にかかるため、試掘・範囲確認調査の必要性が生じ、これに伴って令和元年度から隣接地の試掘調査を、令和３年度には遺跡内における範囲確認調査（11箇所）を実施するに至った。令和元年度調査は２m×２mの試掘坑を２箇所設定して調査を実施、遺構と遺物は確認されなかった。令和３年度は６月７日から６月10日まで２m×２mの試掘坑を２箇所設定して調査を実施した。結果、遺物は出土したものの、その状況から遺物は流れ込みと判断した。続く令和３年11月１日から12月21日にかけて２m×２mおよび１m×３mの調査坑を９箇所設定して範囲確認調査を行った。結果、TP.7とTP.8から中世の柱穴、土坑状落ち込み、溝状遺構が検出された。この調査結果を踏まえて南島原市農村整備課農地防災班と本調査に向けての協議を行い、令和４年度の本調査実施の運びとなった。



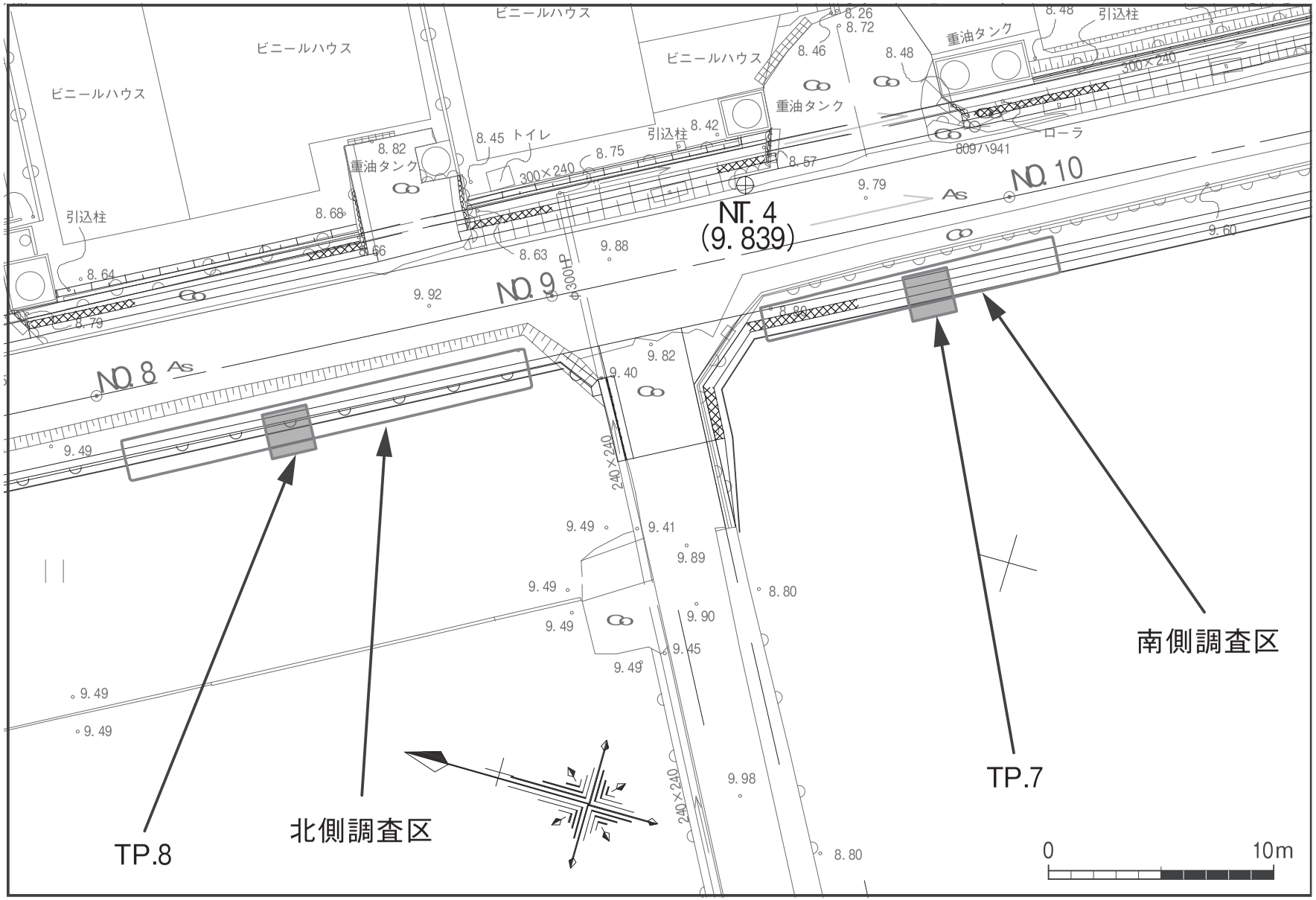
Ⅰ…暗灰黄色土（2.5Y4/2）
　・耕作土。
Ⅱ…オリーブ褐色土（2.5Y4/3）
　・耕盤土。
Ⅲ…黄褐色土（2.5Y5/3）
　・固くしまる。
　・中世の土師器・陶磁器片など含む。
　・近世の陶磁器片など含む。
　・近・現代の陶磁器片など含む。
Ⅳ…暗灰黄色土（2.5Y5/2）

遺構覆土
①…灰黄褐色土（10YR5/2）
　・粘土。
　・３～５cmほどの黄褐色土のブロックを40%程度含む。
②…褐灰色土（10YR4/1）
　・粘土。
　・１～３cm程の黄褐色土粒を５%ほど含む。
　・１cm弱の炭化物粒を少量含む。
※SD1,SK1→中世の遺構と認められる。

第３図　TP.7およびTP.8平面図・土層断面図（S=1/40）



第４図　令和３年度範囲確認調査調査坑配置図（S=1/1000）



第５図　北岡地区農道整備工事地図（S=1/250）

第Ⅲ章　本調査

第１節　調査の概要

本調査は、令和４年５月16日から令和４年６月８日まで実施した。範囲確認調査の結果に伴い、Ⅰ層の耕作土（水田の表土層）とⅡ層の耕盤土（水田の基盤層）は重機による掘削、Ⅲ層の遺物包含層から人力による掘削に切り替えた。今回は狭少の調査範囲であったため、グリッド設定は行わず、人力掘削による層位ごとの取り上げを行った。調査の中で重要な遺物が確認された場合は、座標による取り上げを実施する方向で調査に臨んだ。

東西方向に敷設された道路を境に南北２箇所の調査区を設定したが、TP.7側は南側調査区、TP.8は北側調査区と名称を設定して調査を行った。

第２節　基本土層

本調査で観察した結果、基本土層は以下のとおり設定した。範囲確認調査と本調査の土層の整合性もここで表記する。

北側調査区

Ⅰ層　暗灰黄色土（Hue2.5Y4/2）耕作土。

Ⅱ層　暗灰黄色土（Hue2.5Y4/2）

Ⅰ層を造成するために嵩上げされた層である。昭和40年代の水害まではⅡ層下位に旧耕作土が存在したという。

Ⅲ層　黄褐色粘質土（Hue2.5Y5/3）

土の締まりは良く、粘性も強い。遺物包含層。直径２㎝以下の遺物で構成される。遺物は近世の染付や中世の土師器片・青磁片と時代幅が広い。黄褐色のマンガンの粒子が混入することから水の影響によって堆積したと思われ、遺物は堆積の過程で角や器面が削られたと考える。

Ⅳ層　黄褐色粘質土（Hue2.5Y5/4）

土の締まり・粘性はⅢ層に比べて強い。遺物包含層。直径５㎝前後の遺物で構成される。遺物は中世の土師皿片・青磁片で構成され、土師皿は回転台からの糸切り痕、青磁は体部の鎬蓮弁文など表面観察が可能な遺物が存在する。Ⅲ層に比べて遺物が受けたローリングは少ないと判断する。この水性堆積層は中世の段階で堆積を完結したと考える。

Ⅴ層　黄橙色粘質土（Hue10Y8/8）

土の締まりや粘性はⅢ･Ⅳ層に比して強い。水分を含むと粘性が強力となり、乾燥すると削りが困難なほど硬化する。遺構面はこの段階で確認される。遺物はⅤ層表面で確認されたが、Ⅳ層の遺物が入り込んだものと考えられる。下層確認トレンチの結果、遺物は確認されなかった。無遺物層。

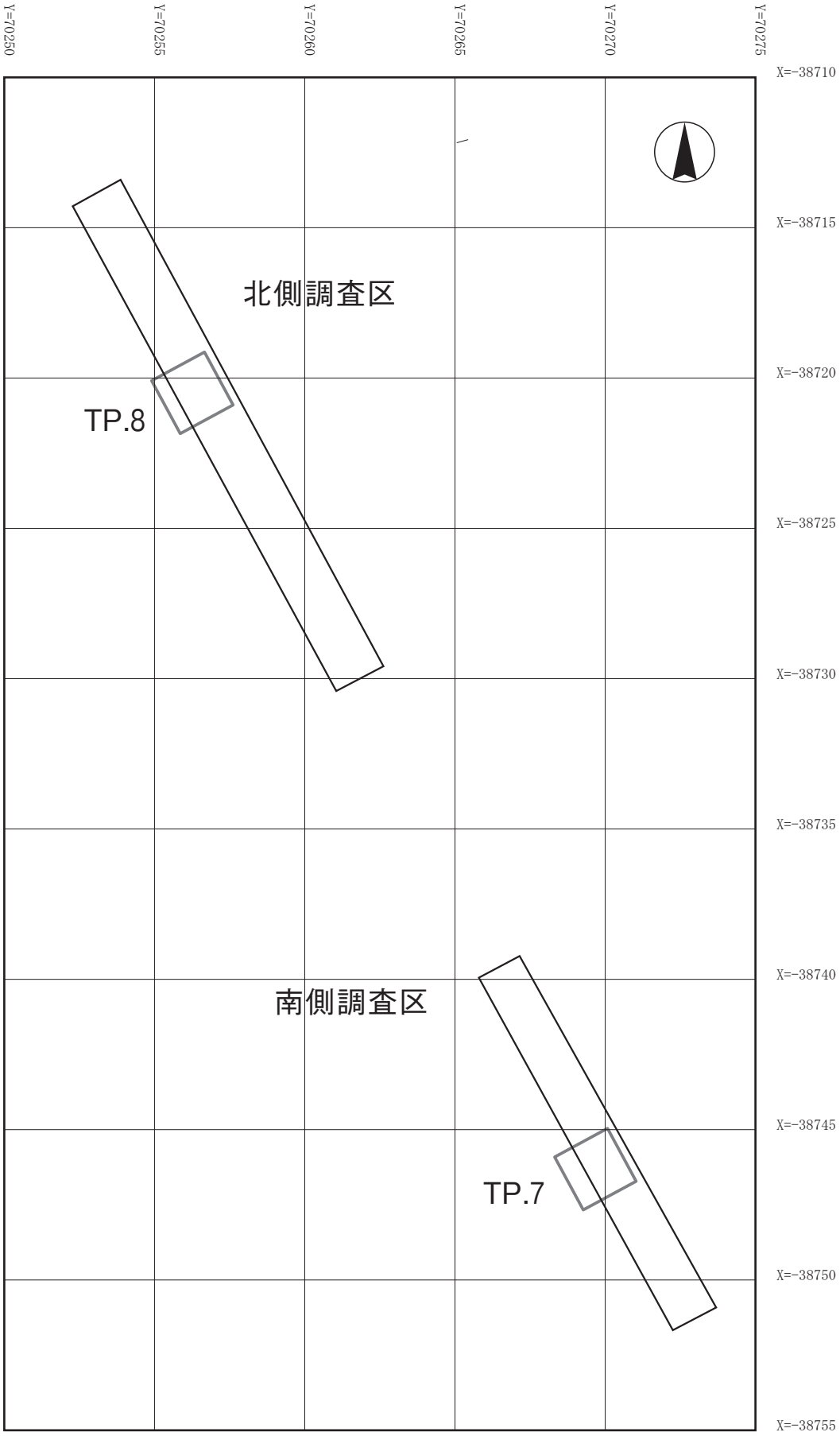
南側調査区

１層　暗灰黄色土（Hue2.5Y4/2）

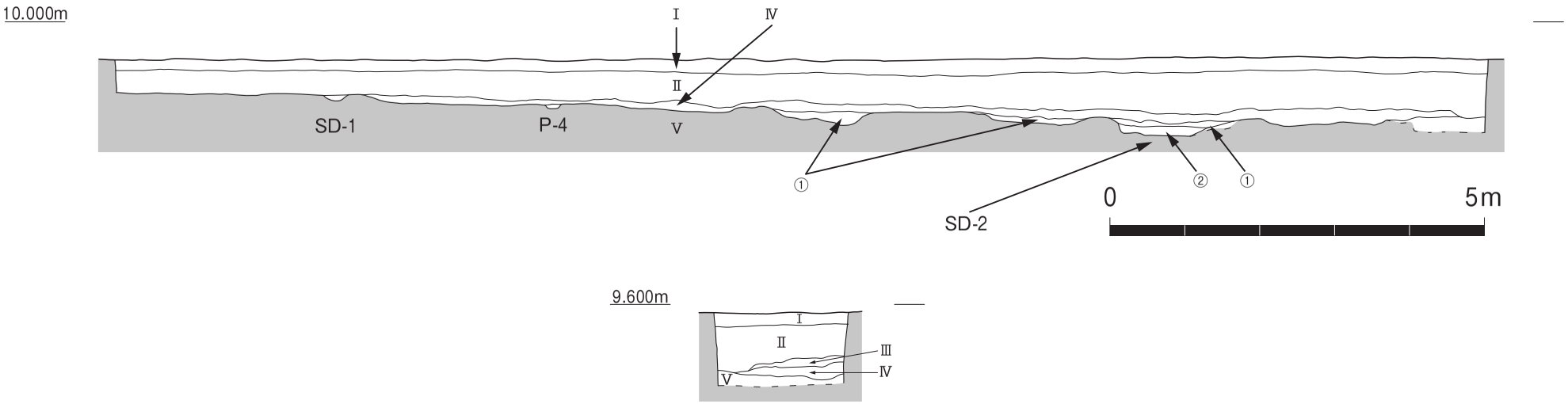
耕作土。

２層　黄褐色粘質土（Hue2.5Y5/4）

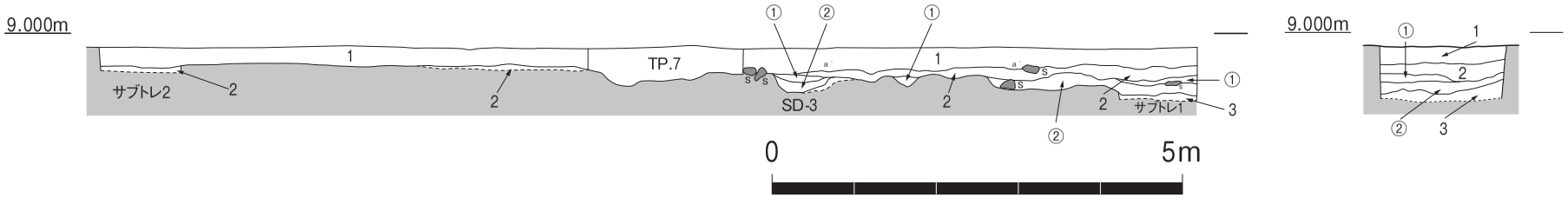
北側調査区のⅣ層に相当する。



第６図　調査区設定図（S＝1/200）



第７図　北側調査区東壁土層断面図（S=1/80）



第８図　南側調査区西壁土層断面図（S=1/80）

３層　黄橙色粘質土（Hue10YR8/8）

北側調査区のＶ層に相当する。

遺構覆土（ピット）

a層　黒褐色粘質土（Hue10YR2/1）

土の締まりは良く、粘性も強い。直径１cm以下の炭化物が多量に混入する。また、ローリングを受けた土師器片や地山層のブロックも確認される。

b層　黒褐色粘質土（Hue10YR2/1）

a層に比べて土の締まりと粘性は強い。質はa層と同じである。

c層　黒褐色粘質土（Hue10YR2/1）

b層に比して土の締まりと粘性は強い。質はb層と同じである。a→b→cの順で粘性が強くなる。

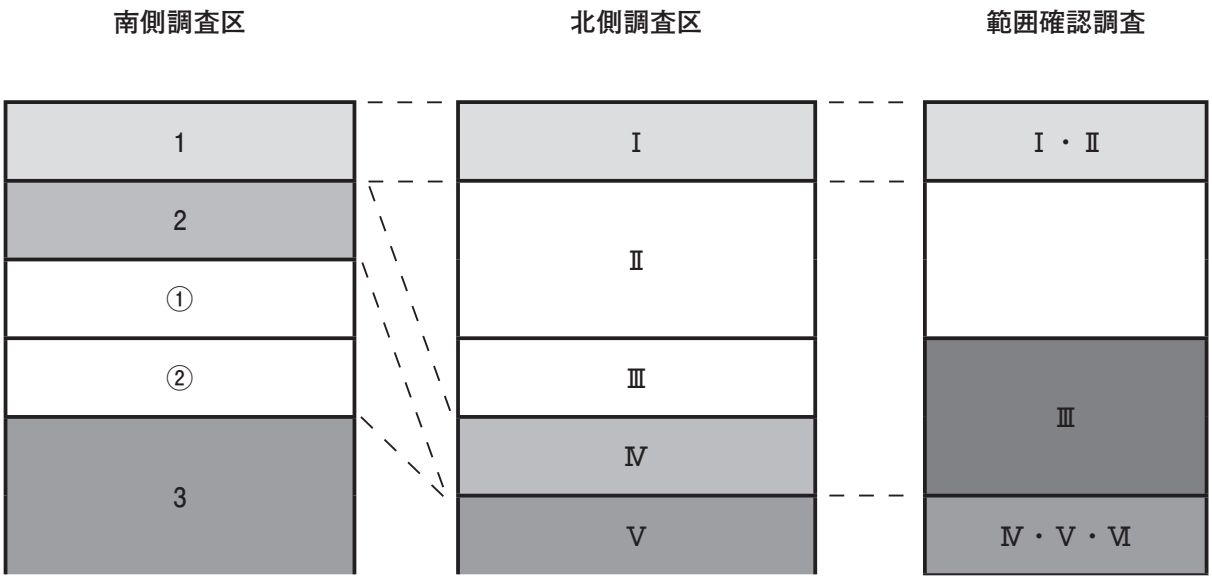
遺構覆土（溝状遺構）

①層　黄灰色粘質土（Hue2.5Y6/1）

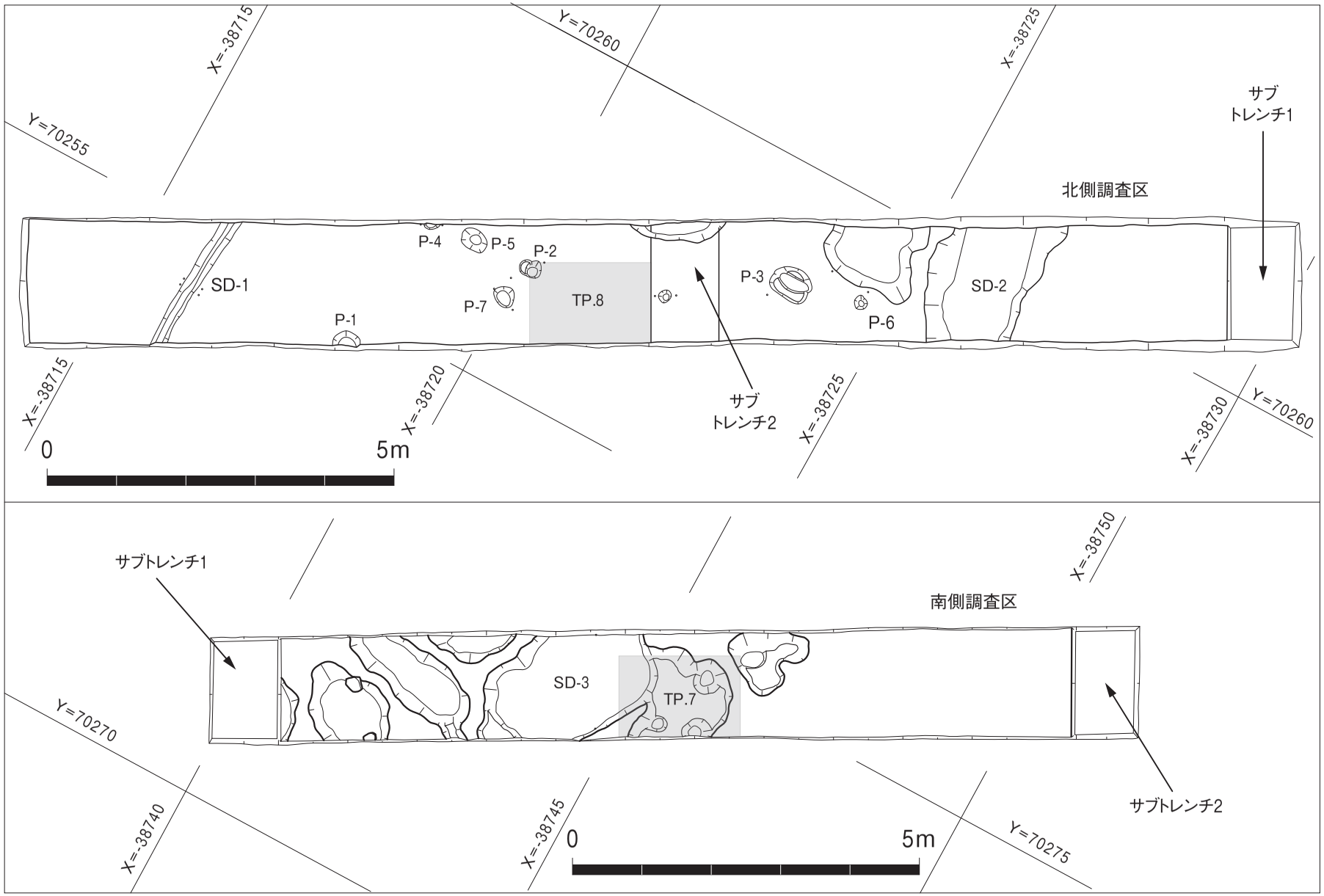
土の締まり・粘性は３層と同じであるが、土質に関してはⅢ層に比してキメが細かい。遺物包含層。遺物もⅢ層と同じ内容で、土師皿は回転台からの糸切り痕、青磁は体部の鎬蓮弁文など表面観察が可能な遺物が存在する。褐色系と灰色系の層がラミナ状の堆積をしているが、水平の相互堆積はしていない。風の影響で水平堆積にならなかったと推察される。また、黒褐色系統の炭化物の含有もこの層の特徴である。

②層　黄灰色粘質土（Hue2.5Y5/1）

土の締まり・粘性は３・４層に比べ強い。土質もまた３・４層に比べ粒子などのキメが細かい。直径１cm前後の炭化物も含まれる。遺物は回転台土師皿、青磁片、須恵器甕片などが確認されている。直径１cm前後の礫や粒状礫は混入されない。単純な粘土層である。自然流路が流れがない溜まり状へ変化し、底に堆積した遺物が土砂などによってパックされたと思われる。この層は３・４層同様、調査区全体で確認されることはなく、自然流路など水の影響を受けた箇所に堆積するのが特徴である。



第１表　範囲確認調査および本調査（北側調査区・南側調査区）土層柱状図



第９図　遺構配置図（S=1/80）

第３節　遺構

遺構面は北側調査区でⅤ層、南側調査区で６層が該当し、検出の結果、ピットと溝状遺構が確認された。北側調査区でピットは11基、南側調査区で２基検出され、半截作業を経て完掘に至った。記録作業は各作業工程ごとに行った。ピットの遺構認定を行った結果、今回は７基のピットを遺構として認定した。ほかのピットは平面や断面が不定形であったり、深度が浅く、規模が小さかったりしたものは遺構として認定しなかった。確実に人為的痕跡としたものだけを遺構として扱うこととする。

P-1（北側調査区）

検出面から土師皿（第11図3）が出土した。ピットの埋没の最終段階に堆積したと考える。

P-2（北側調査区）

範囲確認調査TP.8の北壁隅で確認されたピットである。遺構検出の段階で２つのピットが切りあうと思われたが、調査の結果、段掘りしたことが確認されたことから、１つのピットであることが判明した。

P-3（北側調査区）

P-2同様、切りあうピットではないかと考えたが、調査の結果、ステップを有するピットであると判断した。

P-4（北側調査区）

東壁側で確認されたピットで調査は半截で完掘とした。深度は約40㎝で、平面規模が小さいにもかかわらず、深く掘りこまれたピットであることが判明した。

P-5（北側調査区）

平面形状は楕円形を呈する。図面上では再現できなかったが、断面は底の南側部分が若干上がり気味になっている。

P-6（北側調査区）

P-4同様、平面形状の規模が小さいにもかかわらず、断面形状は深度が深くなっている。右隣にP-6（旧番号）があるものの、断面形状が歪となっていることから人為的な痕跡であると判断しなかった。

P-7（北側調査区）

深度が浅いため遺構としての判断は難しかった。しかし、覆土の堆積が良好で遺物も出土したことから遺構とする判断をした。

SD-1（北側調査区）

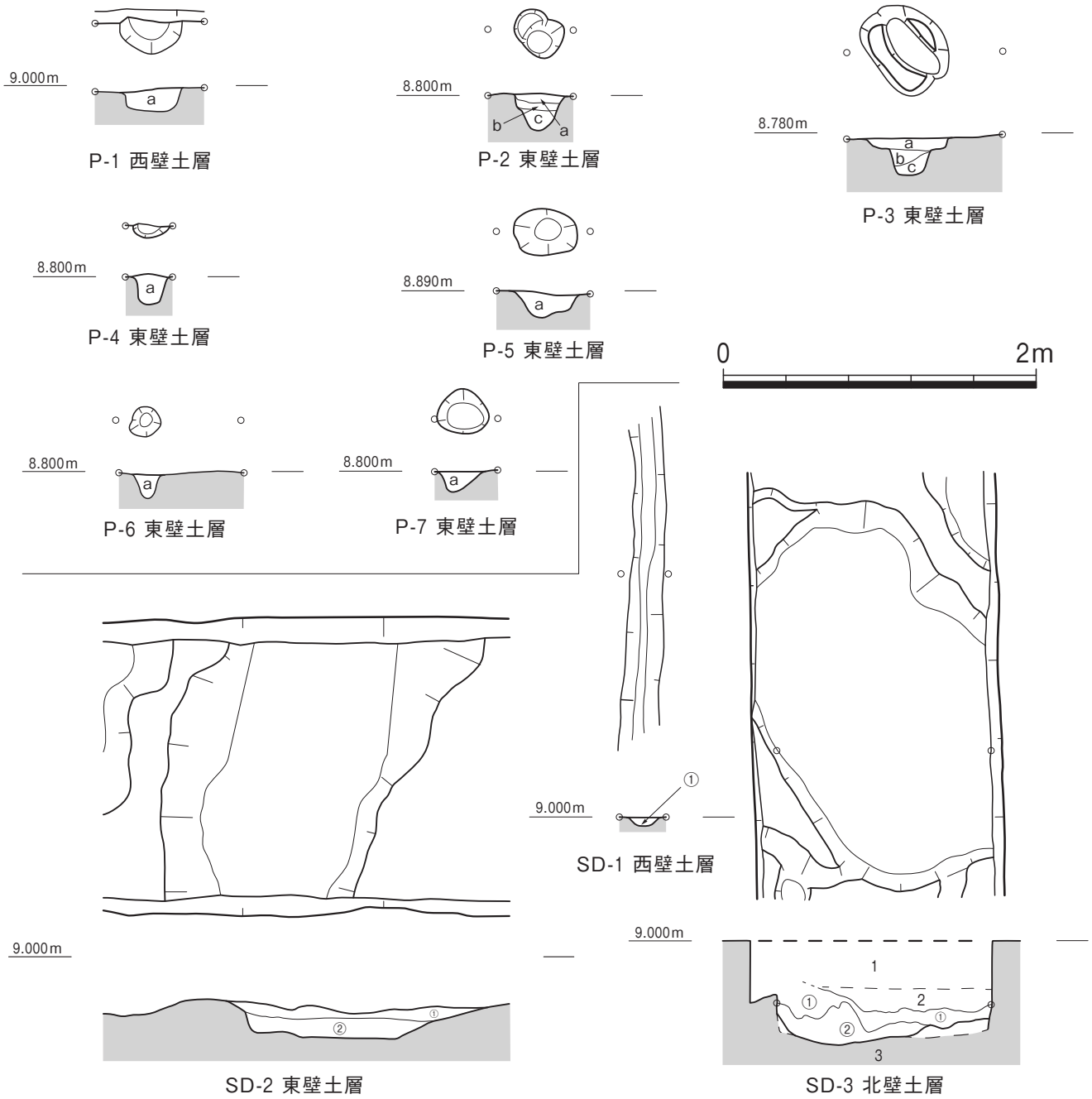
調査区を横断するような状態で確認された。覆土の観察から水性堆積土とした結論に至ったが、遺物の出土がみられないことから、時期の判断は困難であった。うがった見方をすれば、遺構ではなく水害前の旧水田面の機械耕作後の可能性も考えられる。ここでは中世を考えられるので、遺構として紹介する。

SD-2（北側調査区）

調査区を東西に横断する状態で確認された。①層から瓦が出土している。覆土の粘性は下位ほど高く、水性堆積の影響によるものと考えられる。ややグライ化した堆積で空気が遮断された状態での堆積と推定される。

SD-3（南側調査区）

TP.7の南壁面に該当する。全体的に不定形の形状を呈する。土層観察から水性堆積であることが確認され、上層は水平堆積、下層は波状堆積をみることができる。後者は水の流れ（動き）が顕著な段階での堆積といえる。遺物も確認されているが、摩滅の度合いが著しく、ローリングを受けた遺物は図化できないほど荒れて細片化していた。



第10図　個別遺構平面図および断面図（S=1/40）

第４節　遺物（第11図～第17図）

今回の調査で出土した遺物はすべての器面が荒れていた。また小片の遺物が多いことも今回の調査の特徴ともいえよう。このことは、北側・南側調査区を含む遺跡一帯が水性堆積の影響によって遺物が移動していったことがわかる。遺物も移動を繰り返すことで器面が荒れることはもちろん、割れの繰り返しで小破片になっていったことが推定される。

本章では比較的小破片ではない遺物を掲載するように努めた。また、小破片でも遺物の製作工程がわかるものも、ここでは紹介するようにした。

１は北側調査区P-3出土の土師皿片である。比較的硬質で焼成されているため、器面の摩滅は少ない。外底は糸切り痕が確認される。破片資料のため詳細は不明であるが、板状圧痕は存在した可能性が高いと考える。回転方向は不明。立ち上がり成形は体部下半は内湾気味、体部上半は直線状に仕上げられている。全体的には直線状の立ち上がりとなっている。胎土は赤色粒子よりも白色粒子の混入が目立つ。石英の混入も認められる。

２は北側調査区P-3出土の土師皿片である。器面は内・外面ともに摩滅が目立つ。底部から口唇端部まで残存している。外底は糸切り痕が確認され、胎土に含まれる粒子の移動痕跡から左回転であることがわかる。体部下半から口唇端部にかけて直線状に立ち上がりを見せているが、僅かながら外反気味の調整が認められる。内面の底部と体部の境には回転台による指ナデ調整痕が確認される。胎土に赤色粒子が含まれる。

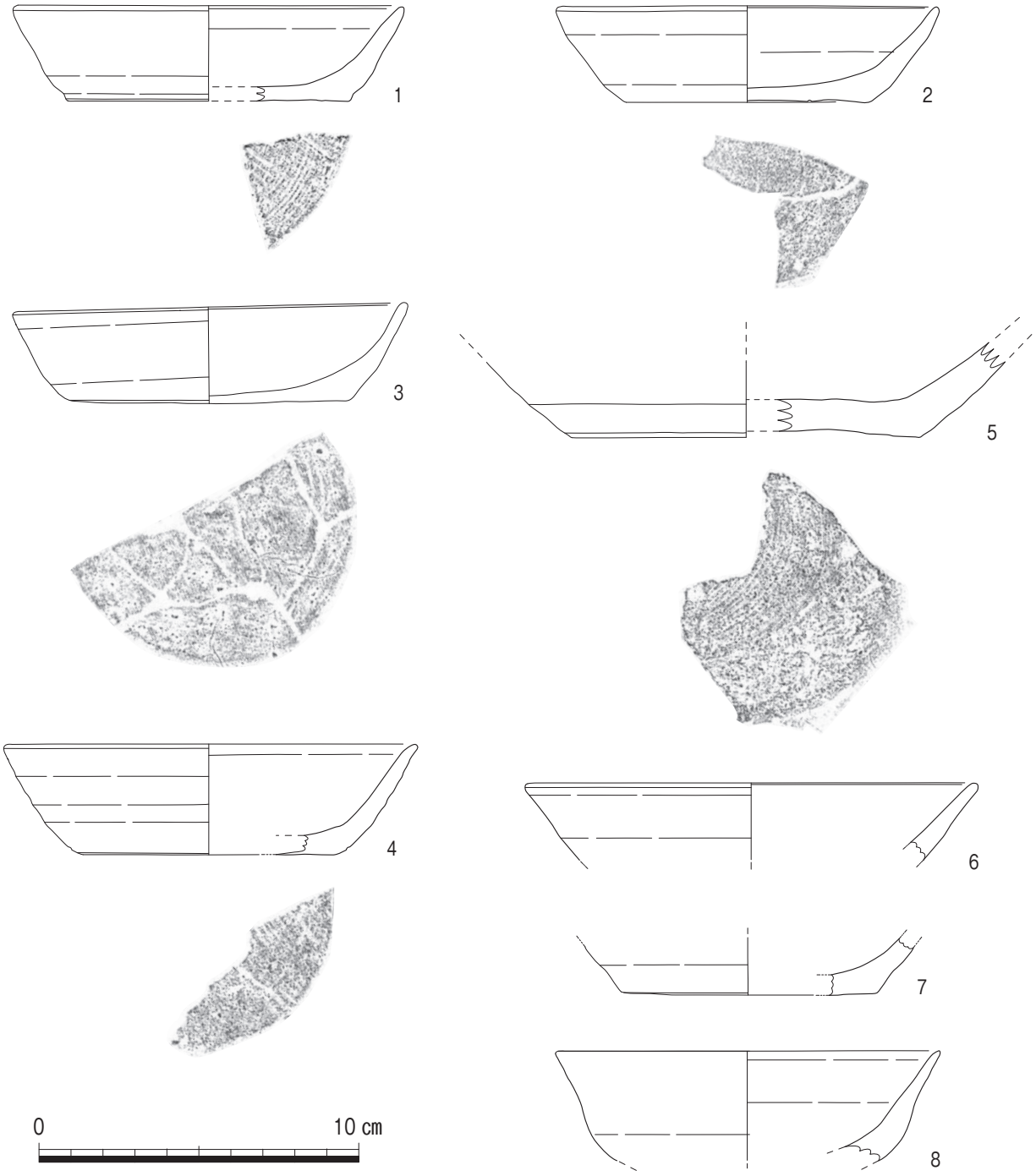
３は北側調査区P-1出土の土師皿片である。内外ともに器面の摩滅が目立つ。胎土は石英の混入が多い。また、直径１㎜前後の赤色粒子の混入も確認される。回転台によって成形され、口縁部から口唇端部にかけてつまみ上げることで器壁を薄く仕上げている。体部と外底の境には指圧痕が確認される。外底には糸切り痕も認められるが、摩滅のため回転方向は不明である。

４は北側調査区P-3出土の土師皿片である。内・外面の器面は摩滅が目立つ。外底は糸切り痕が認められ、胎土に含まれる粒子の移動痕跡から回転台は右回転であることがわかる。外面には器面成形のための調整痕が稜線として残っており、体部下半は内湾気味に、体部上半は外反気味に調整が施されている。胎土には赤色粒子が含まれている。また、器面をはみ出るような状態で直径１㎝以下の石英が混入している。

５は南側調査区出土の須恵器の甕片である。底部の残存のみである全体的に凹凸が目立ち、一般的な須恵器に比べれば軟質な焼成となっている。外底には糸切り痕が確認され、左回転で成形されたことがわかる。底部切り離し直後の胴部が外方向に開く「へたり」が確認される。体部は内・外面ともにナデと指圧による調整が認められ、特に外面は指圧による凹凸が目立つ。

６は北側調査区P-1出土の土師皿片である。体部上半から口唇端部までの残存で、８の残存状況から体部下半は内湾気味、体部上半は外反気味の調整が推定される。内・外面の器面は摩滅が目立つため、調整の詳細は不明である。胎土に赤色粒子が含まれている。

７は北側調査区P-1出土の土師皿片である。底部の一部と体部下半の残存である。ほかの資料に比べ、器面は内・外面ともに摩滅が特に目立つ。そのため、調整の詳細は不明である。胎土には赤色粒子が含まれ、また、直径３㎜以下の石英の混入も赤色粒子の量と同じくらい認められる。



第11図　出土遺物①（S=1/2）

8は北側調査区P-3出土の土師皿片である。体部から口唇端部まで残っており、断面の形状は確認できる。体部下半…内湾気味、体部上半…外反気味に調整が施されている。底部が欠損しているため、回転台の回転方向の詳細は不明である。胎土には赤色粒子が認められる。内・外面ともに器面は摩滅が目立つ。

9は北側調査区出土の土師皿片である。器面の摩滅は顕著であるが、外底の糸切り痕と板状圧痕は

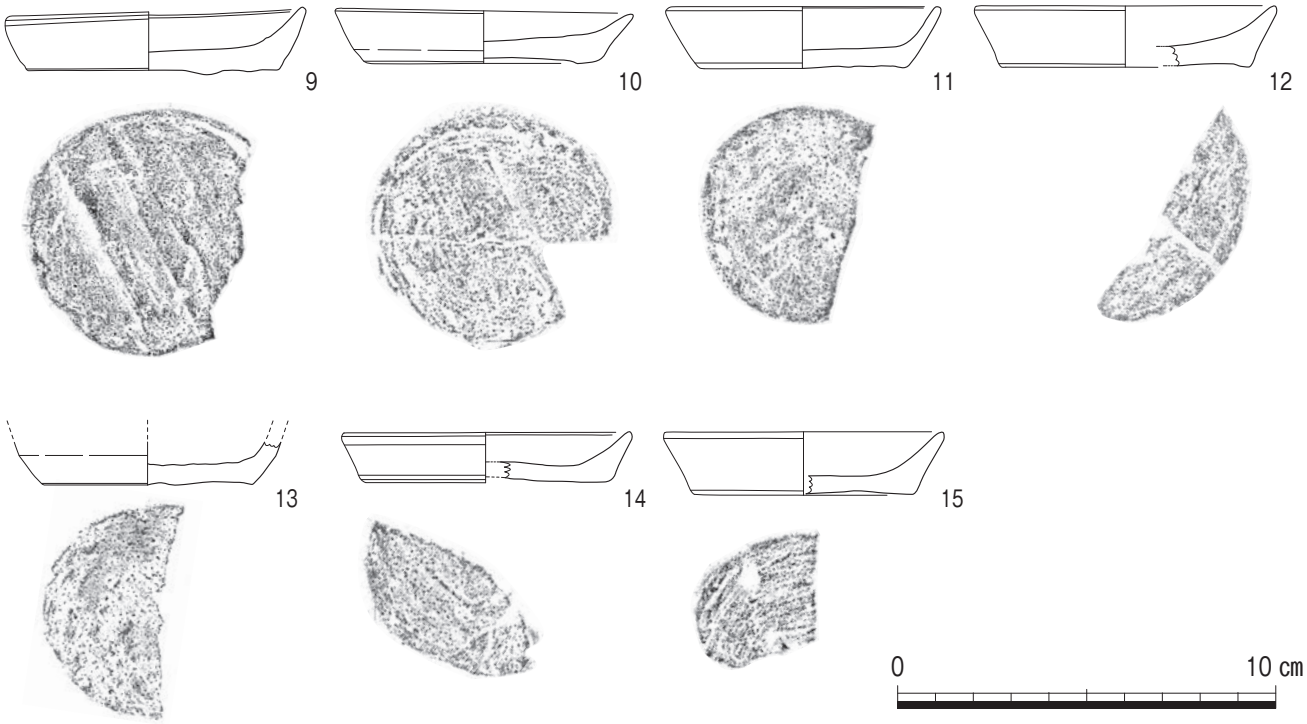
確認できる。回転台による成形で右方向の回転で成形されている。その際に立ち上がりの成形は、若干内湾気味で仕上げられている。胎土には直径１㎜以下の赤色粒子が認められる。内・外面の同じ箇所にススによるシミを確認できるが、可能性の一つとして、この土師皿は灯明皿として使用されたと考えている。

10は北側調査区P-3出土の土師皿片である。９割の残存状況である。器面は内・外面ともに摩滅が目立ち、特に内面の調整の観察は困難な状況である。外底は板状圧痕が確認できるが、これは回転台から切り離した後、仮置きの際に板の上に土師皿を置いた状況をさしている。回転方向も左回転であることがわかる。胎土には赤色粒子が含まれる。また、直径３㎜以下の石英の混入も確認される。体部が指ナデによって外反気味の立ち上がりを呈している。

11は北側調査区P-2出土の土師皿破片である。内・外面ともに器面の摩滅がみられる。外底は板状圧痕がわずかに残る。底部切り離しの糸切り痕は摩滅のため確認することができない。立ち上がりの成形は若干内湾気味に仕上げられている。胎土は赤色粒子の混入がみられ、一部に石英の混入も認められる。

12は北側調査区P-1出土の土師皿片である。内・外面ともに器面の摩滅が目立つ。外底には糸切り痕が確認されるが、摩滅のため回転方向は不明である。器壁は回転台を用いて薄くつまみ上げている。底部に比して口唇端部は薄い器壁に仕上げられている。胎土には赤色粒子の混入が確認される。

13は北側調査区P-7出土の土師皿片である。器面は摩滅が目立つ。外底は糸切り痕が確認される。面に凹凸がみられるので、板状圧痕の可能性も考えたが、断定するには根拠が弱いので、ここでは詳細は不明としたい。糸切りの粒子の移動痕跡から回転台は右方向ということがわかった。また、立ち上がりの残存状況から体部上半から口唇端部にかけて内湾気味に成形されたことが推定される。胎土



第12図　出土遺物②（S=1/2）

は赤色粒子というよりも白色粒子の方が多く混入されている。石英の混入も僅かであるが確認できる。

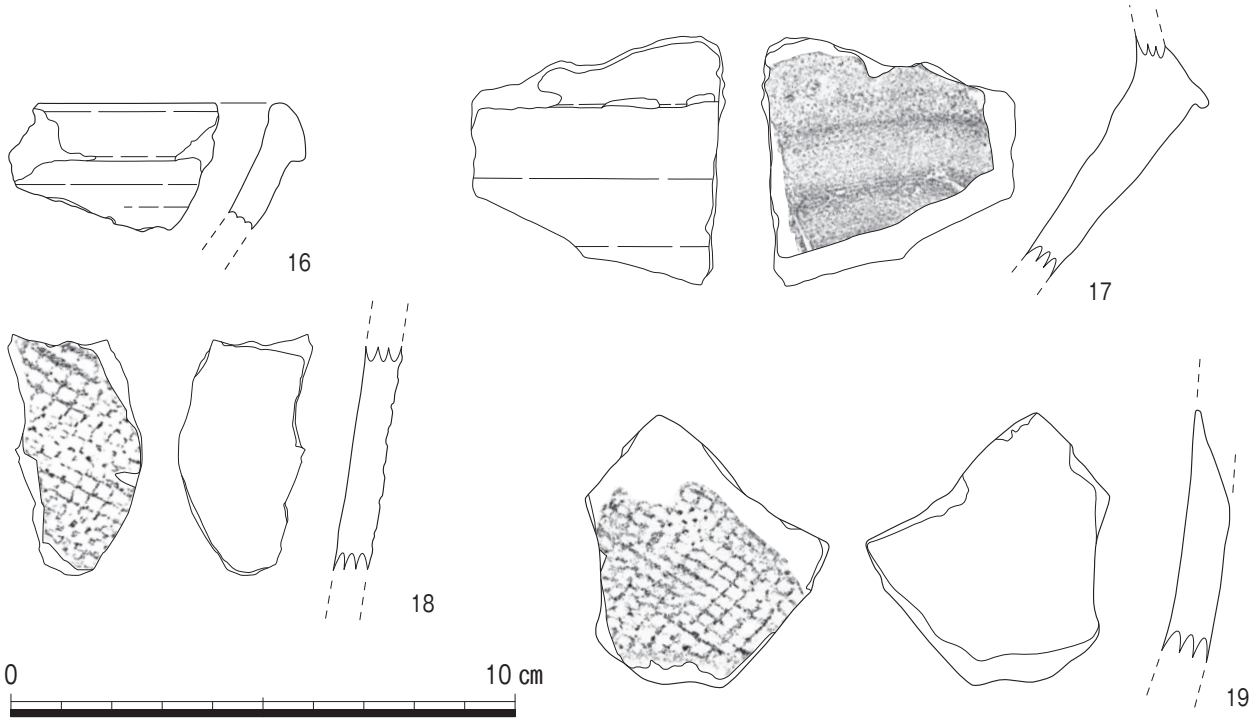
14は北側調査区P-6出土の土師皿片である。全体的に摩滅が目立つ。そのため、外底には僅かであるが、糸切り痕と板状の痕跡をみることができる。回転台は右方向で成形が行われている。胎土には直径１㎜以下の赤色粒子の混入が認められる。

15は北側調査区P-3出土の土師皿片である。器面は内・外面ともに摩滅が目立つ。回転台を使って成形されているが、粒子の移動痕から右回転と思われる。器壁はつまみ上げによって作られており、外面の体部下半は指ナデ調整が認められる。体部下半の指ナデ調整によって断面は外反する形状となる。外底には直径５㎜前後の石英が確認される。

16は南側調査区出土の須恵器片である。器種は鉢と思われる。口縁部の断面形状は玉縁形を呈しており、玉縁口縁の白磁碗を模した感がある。破片資料のため断定することはできないが、口縁部の形状や器種の状況から、内面には摺目があった可能性が高い。可能性の一つとして擂鉢が考えられる。

17は南側調査区出土の須恵器片である。胴部から口縁部の残存で、口唇端部は欠損している。口縁部の外面は鍔付型石鍋の鍔部に似た形状となっている。鍔部に該当する箇所が胴部最大径にあたり、そこから体部下半にかけて「く」の字型に屈曲している。胴部最大径を成形する際、余った粘土を胴部側に粘土を織り込む調整を行っている。外面は指圧痕がみられる。内面は回転台による指による右方向の引き上げ痕跡が、数段の畝状となってみることができる。一部に胴部側から口縁部側へ引かれた沈線が確認でき、器種が擂鉢であることがわかった。

18は南側調査区出土の須恵甕片である。外面は格子目のタタキ締めの調整が確認される。しかし、内面にはタタキ調整はみられず、丁寧なナデ調整のみである。器壁は１㎝を呈し、現存する立ち上が



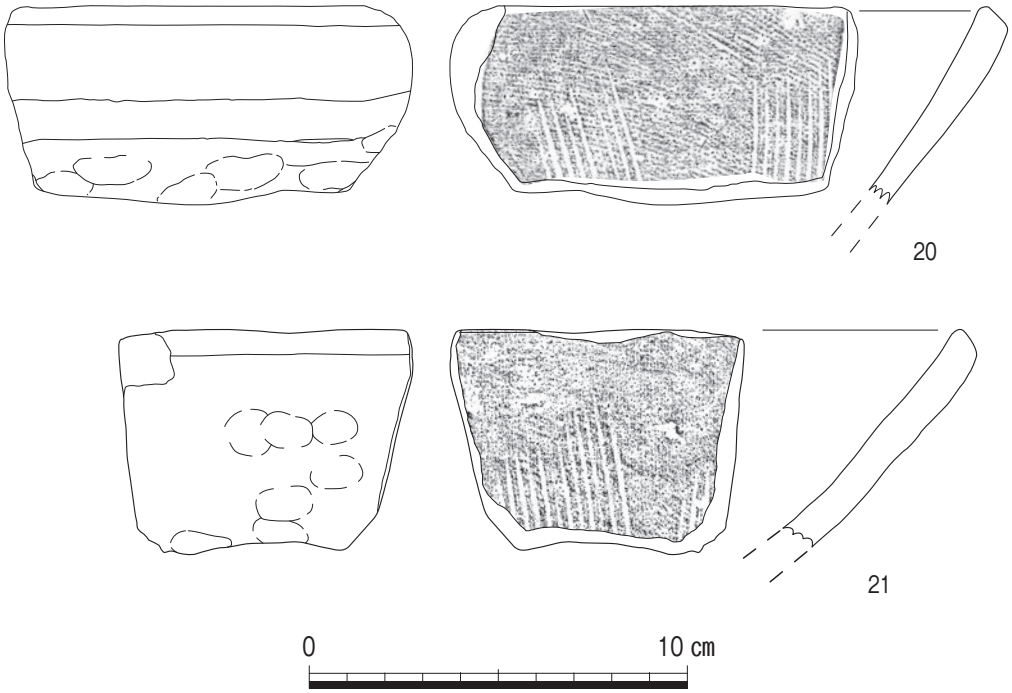
第13図　出土遺物③（S=2/3）

りの直線状である。内・外面ともに指ナデや指圧痕が認められる。外面はタタキが明瞭に残っていることからナデ調整等が行われた後、タタキ締めが施されたと考える。

19は南側調査区出土の須恵器の甕片である。須恵質というよりは瓦質に近い甕片だが、外面にタタキ締めの痕跡があることと、器種が甕であることから須恵器に含めた報告をしたい。甕の胴部片で、内・外面に粘土接合帯を見ることができる。焼成は全体的に甘い。外面はタタキ締めの後の指圧痕が確認できる。

20は南側調査区SD-3出土の瓦質の擂鉢片である。摺目は９条確認される。胴部上半から口唇端部にかけての残存で、外面は横位のナデと指圧痕が認められ、面的に凹凸が目立つ仕上がりとなっている。内面は斜め方向の工具調整痕が確認される。摺目よりも目の間隔が狭い工具で調整されている。その後にナデ消しが行われ、工具痕を目立たないように仕上げられている。端部は平坦調整され、粒子の移動痕跡から右方向回転台で成形されたことがわかる。

21は南側調査区出土の瓦質土器片である。内面に摺目が確認されるので擂鉢であることがわかる。摺目は12条認められる。体部上半から口唇端部にかけて残存しており、回転方向は右方向である。外面は横方向のナデが目立つ。内・外面ともに指圧痕も認められる。端部は平坦処理が行われたことがわかる。器面は摩滅が目立ち、瓦質特有の燻しも薄くなっている。



第14図　出土遺物④（S=1/2）

22は北側調査区出土の青磁碗片である。体部下半から口唇端部にかけての残存である。内・外面ともに貫入が確認できる。立ち上がりは体部下半が内湾気味、体部上半は外反気味に調整が施され、さらに、口唇端部を外面方向に折り込むことで外反を目立つように成形している。一部に釉がかかっていない箇所もみられる。

23は北側調査区から出土した磁器片で碗と推定される。器壁は２㎜で内・外面ともに翡翠釉が施さ

れている。また、両面ともに貫入も確認できる。釉は薄くかけられているのが特徴で、貫入の影響もあって釉が素地から剥がれやすくなっている。日野江城跡からも翡翠釉の出土例が報告されている。

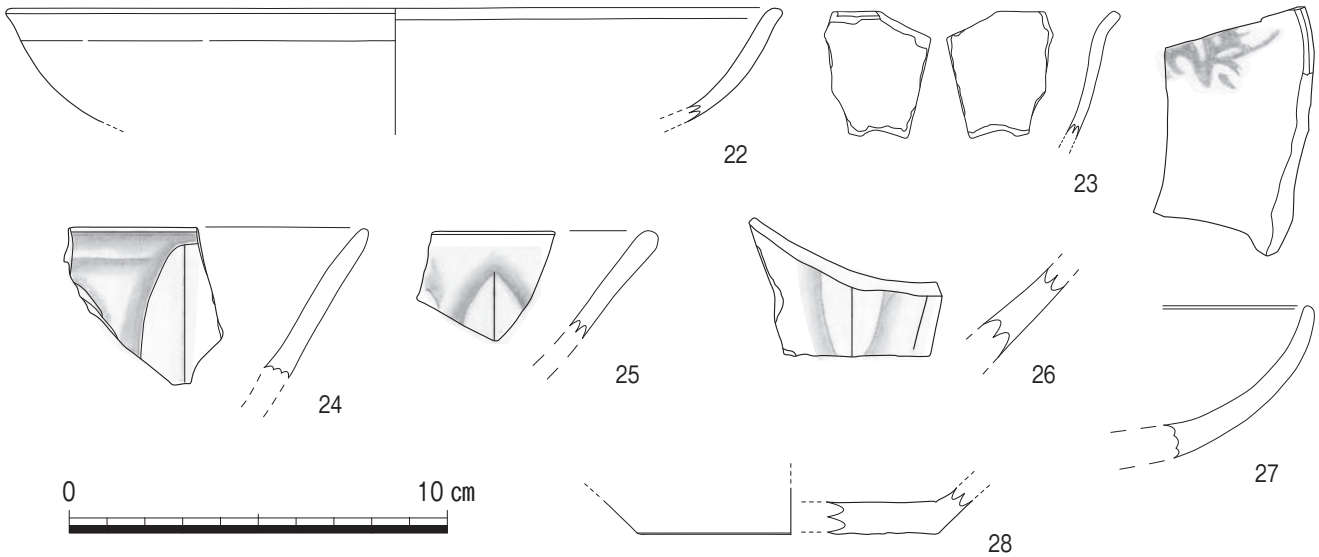
24は北側調査区出土の青磁碗片である。口縁部から口唇端部にかけての残存で、外面に残る文様の状況から鎬蓮弁文の碗であることがわかる。蓮弁間の口縁部は成形の際に削り込むことで蓮弁を立体的に浮き上がらせている。内面は破片資料のため文様の詳細は不明である。内・外面とも貫入がみられる。

25は南側調査区周辺から採集した青磁碗片である。口縁部から口唇端部にかけて残存している。外面の文様から鎬蓮弁文の碗であることがわかる。内面は破片資料のため詳細は不明であるが、残存する箇所は無文で確認される。24に比べて釉は薄くかけられている。貫入は認められない。

26は南側調査区から出土した青磁碗片である。体部下半の残存であるが、外面の凹凸から鎬蓮弁文であることがわかる。釉がけの時に蓮弁文を目立たせるため、蓮弁の両側に断面「レ」の字型の切り込みを入れている。内面は無文であるが、見込み部分に文様が施されていた可能性は高い。

27は南側調査区出土の白磁碗片と思われる。口唇端部から体部上半の残存で、内・外面ともに釉の劣化が認められる。口縁部から口唇端部は内湾している。内面の体部上半部には染付を確認できるが、劣化のため文様の詳細は不明である。

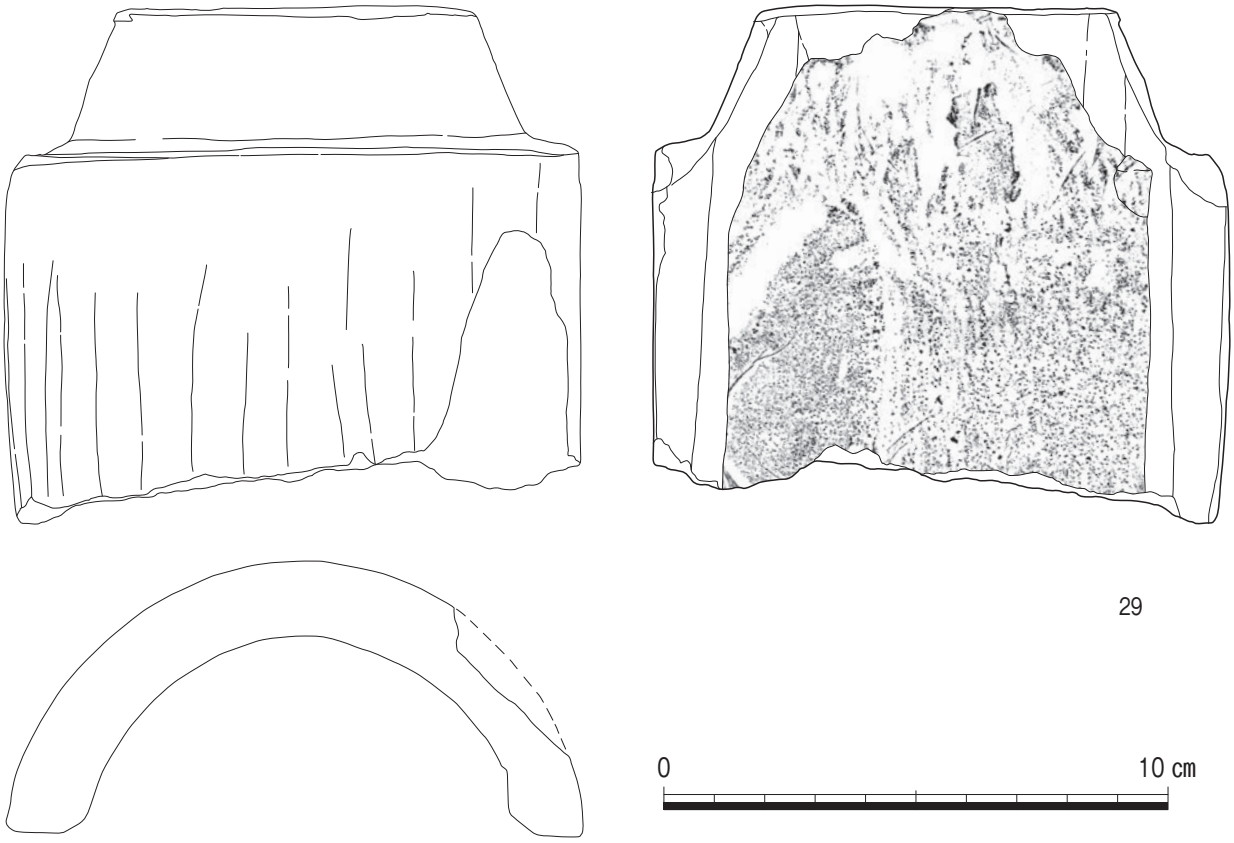
28は北側調査区出土の青磁皿片である。底部の残存である。外底は糸切り痕が確認され、底部切り離し後に置いた板状圧痕もみられる。釉がけのため回転方向は不明である。内面は見込み圏線が認められる。僅かながら、見込みの中心方向に曲線状の文様がみられるが、破片のため詳細は不明である。



第15図　出土遺物⑤（S=1/2）

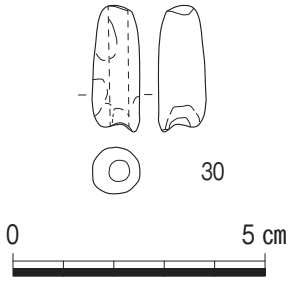
29はSD-2内からの出土した尻部と玉縁部を残す丸瓦片である。焼成は良好で、断面幅は約２cmを測る。外面は燻しの残りが良好で、丸瓦部の表面にはヘラ状工具による調整が長軸方向に施される。内面はコビキ・模骨痕・布目痕が認められる。コビキは素材切り離し時に丸瓦の長軸方向に対して直交するかたちで裁断していることがわかる。模骨は約2.5cm幅で残っている。布目は僅かながら確認できる。また、玉縁部との接合箇所はヘラ状あるいは棒状工具によって調整が行われている。縁部は

ヘラ状工具による面取りが確認される。内面は器面が荒れていることから、長時間の水等の堆積の影響を受けていた可能性が高い。丸瓦の尻部近辺に釘穴の穿孔痕が認められないことから、この資料は軒丸瓦ではないことがわかる。



第16図　出土遺物⑥（S=2/3）

30は北側調査区SD-3出土の土錐片である。約２分の１の残存で、全体的に器面の摩滅が目立つ。胎土のキメは細かく、粒子の混入もほとんどみられない。両側の土錐孔の直径の変化がみられないことから、孔は丸棒状の道具に粘土（胎土）を巻いて作ったと考えられる。



第17図　出土遺物⑦（S=2/3）

遺物No.	種別	部　位	出土地区	遺構	層位	大きさ（cm）			胎　土	焼成	色　調		備　考
						口径	器高	底径			内　面	外　面	
1	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-3	-	(12.1)	3.0	(8.8)	角閃石、長石、石英	良好	にぶい浅黄橙（Hue7.5YR7/4）	にぶい浅黄橙（Hue7.5YR7/4）	13世紀
2	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-3	-	(11.8)	3.0	(7.6)	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	橙（Hue5YR7/6）	橙（Hue5YR7/6）	13世紀
3	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-1	-	10.3	3.0	8.8	長石、石英	良好	橙（Hue5YR7/6）	橙（Hue5YR7/6）	
4	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-3	-	(12.9)	3.5	(8.0)	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	橙（Hue5YR7/6）	橙（Hue5YR7/6）	
5	須恵器	底部	南側調査区	-	4	(3.0)	(10.8)	-	長石、石英	良好	灰（Hue5Y6/1）	灰（Hue5Y6/1）	
6	土師器	口縁部	北側調査区	P-1	-	(14.1)	(2.4)	-	角閃石、長石、石英、赤色粒子	やや良	にぶい橙（Hue7.5YR7/4）	にぶい橙（Hue7.5YR7/4）	
7	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-1	-	(1.8)	(8.0)	-	長石、石英、赤色粒子、雲母	やや良	浅黄橙（Hue7.5YR8/4）	浅黄橙（Hue7.5YR8/4）	
8	土師器	口縁部	北側調査区	P-3	-	(11.9)	(3.4)	-	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	橙（Hue5YR7/8）	橙（Hue5YR7/6）	
9	土師器	口縁部-底部	北側調査区	-	4	7.8	1.7	6.6	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	浅黄橙（Hue7.5YR8/4）	浅黄橙（Hue7.5YR8/4）	13世紀
10	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-3、P-4	-	7.9	1.4	6.2	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	橙（Hue5YR7/6）	橙（Hue5YR7/6）	13世紀
11	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-3、P-2	-	(7.1)	1.6	(5.4)	長石、石英、赤色粒子	良好	橙（Hue5YR6/6）	橙（Hue5YR6/6）	13世紀
12	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-1	-	(7.9)	1.6	(6.6)	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	橙（Hue5YR7/6）	橙（Hue5YR7/6）	13世紀
13	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-7	-	-	(1.1)	(5.5)	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	にぶい黄橙（Hue10YR7/3）	橙（Hue2.5YR6/8）	
14	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-6	-	(7.6)	1.3	(6.2)	角閃石、長石、石英、赤色粒子	良好	橙（Hue5YR6/8）	橙（Hue5YR6/8）	13世紀
15	土師器	口縁部-底部	北側調査区	P-3	-	(7.2)	1.7	(5.8)	角閃石、長石、石英	良好	にぶい橙（Hue7.5YR6/4）	にぶい橙（Hue7.5YR6/4）	
16	須恵器	口縁部	南側調査区	サブトレ1	1、2	-	(3.3)	-	長石、石英	良好	灰白（Hue2.5Y7/1）	灰白（Hue5Y8/1）	
17	須恵器	口縁部-体部上半	南側調査区	-	4	-	(6.5)	-	長石、石英	良好	にぶい橙（Hue7.5YR6/2）	灰褐（Hue5YR6/2）	
18	須恵器	胴部	南側調査区	-	4	-	(6.4)	-	長石、石英	良好	青灰（Hue5PB6/1）	青灰（Hue5PB6/1）	
19	須恵器	体部	南側調査区	サブトレ1	1、2	-	(6.7)	-	長石、石英	良好	浅黄橙（Hue7.5YR8/4）	浅黄橙（Hue7.5YR8/4）	
20	瓦質土器	口縁部-体部上半	南側調査区	SD-3	2	-	(5.2)	-	長石、石英	やや良	灰白（HueN7/）	灰白（HueN7/）	
21	瓦質土器	口縁部-体部上半	南側調査区	-	4	-	(5.9)	-	長石、石英	やや良	暗灰黄（Hue2.5Y5/2）	灰黄（Hue2.5Y6/2）	
22	青磁	口縁部	北側調査区	-	4	(20.2)	(3.1)	-	精緻	良好	黄褐（Hue2.5Y5/4）	灰白（Hue2.5Y7/1）	
23	磁器	口縁部	北側調査区	-	4	-	(2.5)	-	精緻	良好	翡翠色	灰白（Hue2.5Y8/1）	
24	青磁	口縁部	北側調査区	-	4	-	(3.0)	-	精緻	良好	灰白（Hue10Y7/1）	灰白（HueN8/）	龍泉窯 13世紀
25	青磁	口縁部		表採	-	-	(2.1)	-	精緻	良好	灰白（Hue10Y7/1）	灰白（HueN8/）	龍泉窯 13世紀
26	青磁	体部	南側調査区	-	4	-	(2.7)	-	精緻	良好	明緑灰（Hue10GY7/1）	灰白（Hue2.5Y8/1）	龍泉窯 13世紀
27	白磁	口縁部-体部上半	南側調査区	サブトレ1	1、2	-	(3.0)	-	精緻	良好	灰白（Hue2.5Y8/1）	灰白（Hue2.5Y8/1）	
28	青磁	底部	北側調査区	-	4	-	(0.9)	(5.8)	精緻	良好	明オリーブ灰（Hue2.5GY7/1）	灰白（Hue7.5Y8/1）	
29	瓦	玉縁部-尻部	北側調査区	SD-2	1	最大長 (12.5)	最大幅 15.3	最大厚 2.0	長石、石英、雲母	良好	灰（HueN4/）	灰（HueN4/）	
30	土製品	-	南側調査区	SD-3	2	最大長 (2.5)	最大幅 0.9	-	長石、石英、赤色粒子	やや良		にぶい橙（Hue7.5YR7/4）	

第２表　出土遺物観察表

第Ⅳ章　まとめ

今回、時間的制約の中での調査となったにもかかわらず多くの遺物が確認された。また、数基の遺構も認められたことで、この地区に人の活動の痕跡があることも証明された。出土遺物は土師皿の破片が多くみられ、中には完形に近いものも認められた。擂鉢や甕といった日常生活に使用された容器も数点確認された。また、小破片であったが青磁の出土も確認され、その一部は鎬蓮弁文を有する碗であることも判明した。

本章では今回の調査で把握した遺跡の性格に触れることでまとめとしたい。

第１節　出土遺構について

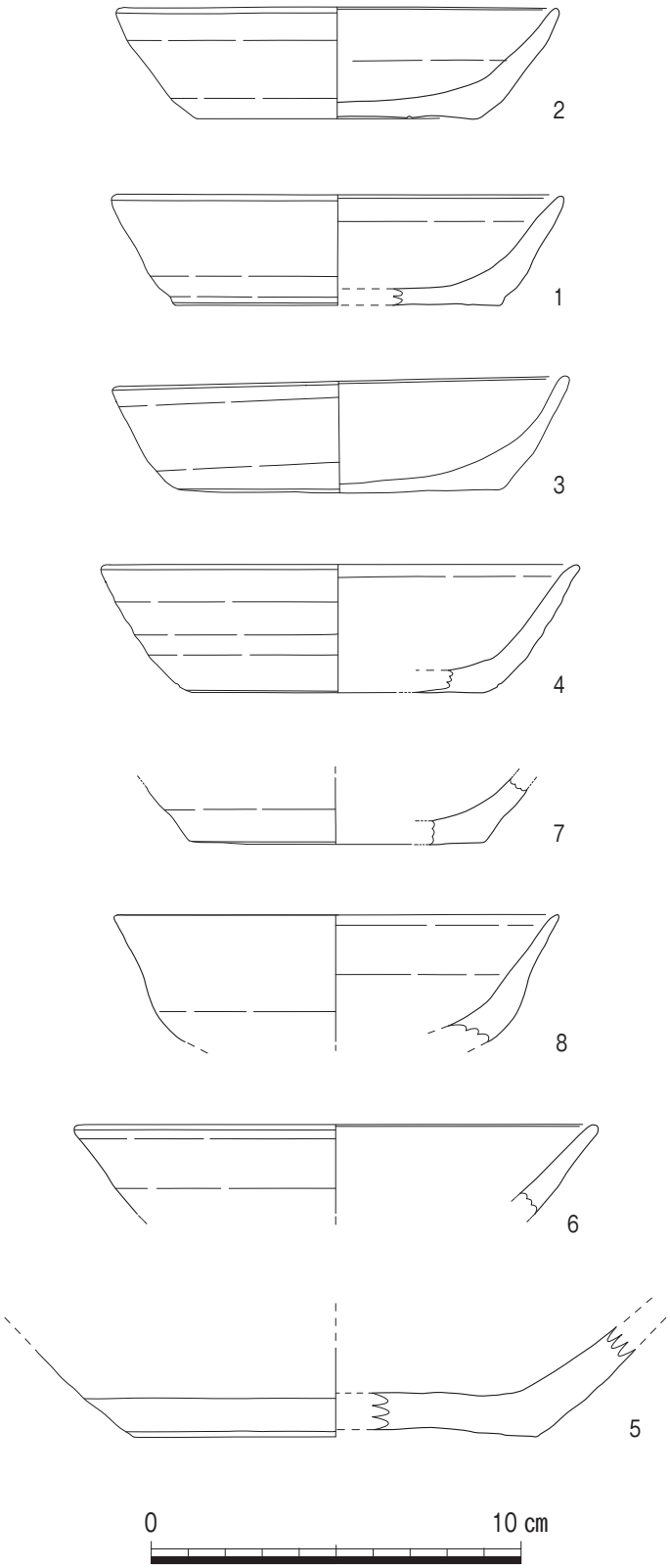
北側・南側調査区からそれぞれ溝状遺構が確認された。すでに範囲確認調査の段階で確認されていたので、流路としての性格を有する遺構として視野に入れつつ本調査を行った。結果、溝状遺構は自然流路としての性格を有するものとして判断した。遺構の形状が不定形であること、そして、遺構内の土がラミナ状の堆積を呈していることが理由である。さらに遺構内から出土した遺物は小破片で構成され、かつ、器面が荒れていることも判断材料としてあげることができる。

北側調査区からピットも確認されているが、ピットも検証した結果、７基が人為的な遺構と判断、残りは窪地に堆積したものとした。ピット内からは土師皿の破片が出土しており、覆土もすべて同じものであることが認められた。しかし、出土した土師皿も器面の荒れが顕著であることから、ピットも水性堆積の影響を受けたことで土師皿片の器面が荒れたと推察される。今回の調査では遺構・遺物ともに水の影響を受けたことはわかったが、調査範囲が限定されたため、ピットの水性堆積土は、流路の氾濫によって生じたかの事実確認までは至らなかった。

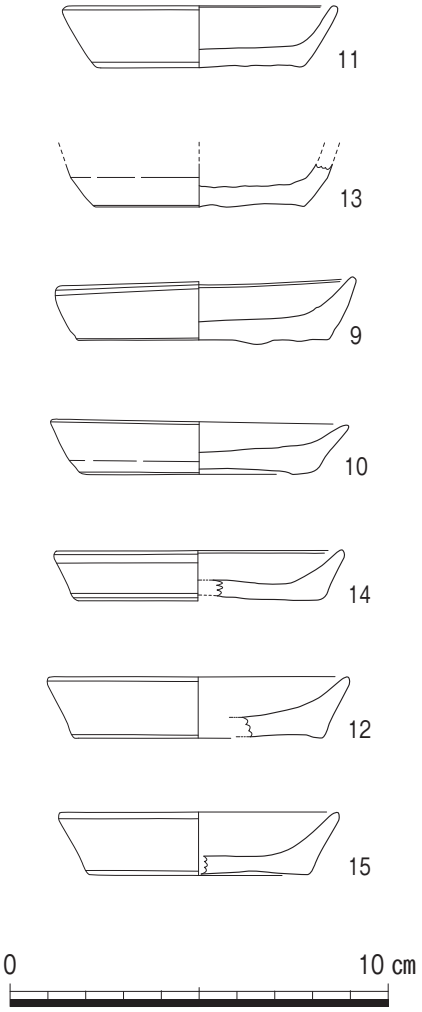
第２節　出土遺物について

土師皿（第18図および第19図）

今回、15点図化した土師皿は観察の結果、２つに分類することができた。（第18図および第19図）規格はそれぞれの比較を行った結果、第18図で口径が14cm以下・器高が４cm以下・底径が８cm以下、第19図で口径が８cm以下・器高が２cm以下・底径が７cm以下のもので構成されることがわかった。さらに含有量の違いはあるものの、胎土には赤色粒子の混入が認められた。近辺の発掘調査事例で2011年の日野江城跡の調査報告書で記載されている。また、石英の混入も確認することができた。これら土師皿の相対的な時期は、小破片であるため断定は難しいが、形状等の観察も含めた結果、１・２・９・10・11・12・14は13世紀代の位置づけができる。



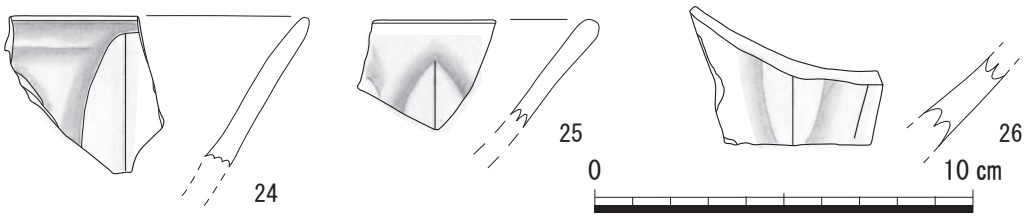
第18図　出土土師皿①（S=1/2）



第19図　出土土師皿②（S=1/2）

陶磁器（第20図）

出土遺物は主に青磁で構成されている。なかでも鎬蓮弁文であることが確認される。破片資料（24・25・26）であるものの、年代は13世紀代に位置づけすることが可能である。出土した土師皿の一部（１・２・９・10・11・12・14）に同時期のものがあるので、中世前期の段階には青磁を入手できる権力者の存在をうかがい知ることができる。



第20図　出土青磁碗（S=2/3）

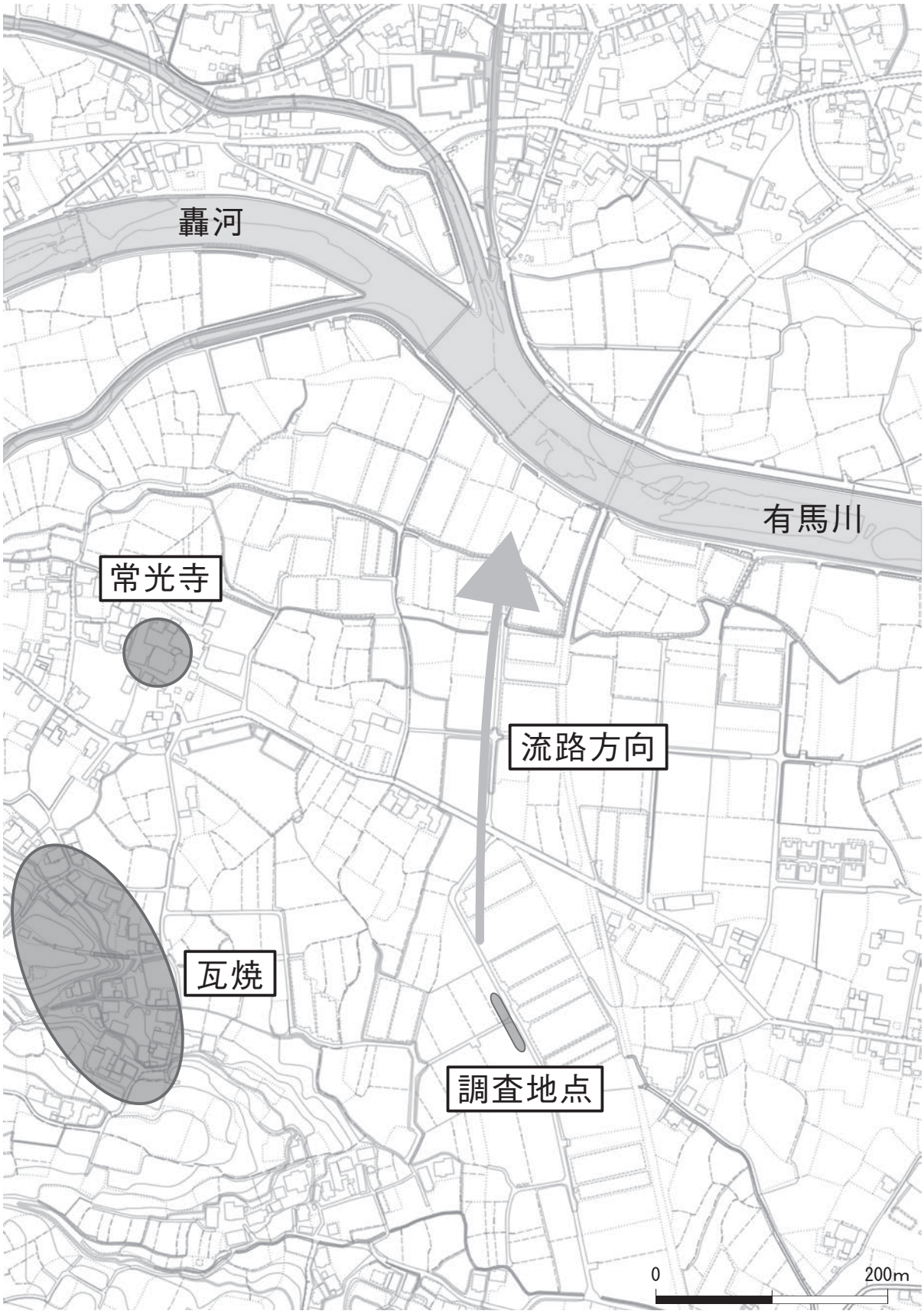
第３節　「瓦焼」の地名について

調査区西側に「瓦焼（かわらやき）」という地名がある。地名の詳細は不明であるが、考察材料の一つとして、瓦を焼いた場所として検討することができよう。

今回の調査で丸瓦が確認されたが、SD-2からの出土で、自然流路内からの出土であった。瓦そのものは上層からも出土しているが、それらは水性堆積の影響で小破片化しており、また、一部には引っ掛け瓦の破片も確認されたことから、近現代の時期であると判断した。特に器面の荒れが目だったが、SD-2出土の瓦は凹面が水性堆積の影響で器面の荒れが生じているものの、全体的には観察ができるくらい良好な状態であった。丸瓦は本瓦葺きで幅も15cmと比較的大きい瓦であることから、寺院もしくは城郭に葺いた可能性が高い。周辺で瓦葺きの建築物は日野江城が該当する。日野江城の並行期の瓦とすれば、16世紀代に位置づけが可能となる。13世紀代の瓦とすれば、中世山城の初期段階となることから城内に瓦葺き屋根は存在しないので、それ以降の16世紀代の位置づけが自然であろう。

今のところ、瓦焼で瓦を焼いたという痕跡は見当たらない。しかし、当地区は日野江城の周辺域ということもあって、瓦を焼いた可能性は否定できない。当地区には丘陵上に神社が存在するが、丘陵の斜面を利用して窯が敷設されたことも考えられるが、その有無は確認できていない。今後、分布調査で解決できれば幸いである。出土した瓦は流路内であるが、地山面を削って水が流れていた。地山そのものは質の良い粘質土であるが、この地山の粘質土が瓦の胎土として利用されれば、近くで焼いたことも十分あり得る。しかし、瓦を焼いた痕跡がないことから、現段階では可能性の域を超えることはできない。本章では案として提示したい。

今回の調査では13世紀代と16世紀代の資料が確認された。これは日野江城の築城期から全盛期までの期間を指し示している。日野江城の周辺域に今回の調査区は位置するが、ここだけに限らず、今福遺跡や北岡金比羅祀遺跡なども中世の資料が確認されていることから、日野江城を軸とした遺跡とする見方を持つべきでないかと考える。今後の調査研究に期待したい。



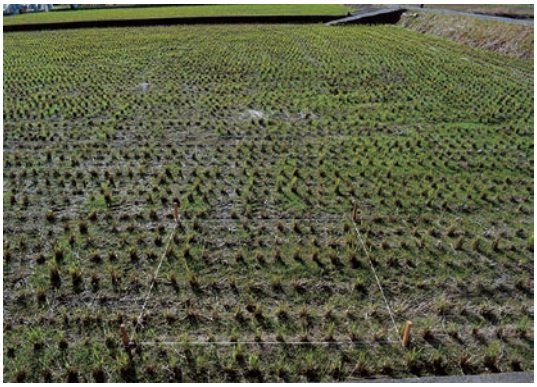
第21図　調査地点および瓦焼地名配置図

図　　版

図版 1

（北側調査区/南側調査区）

航空写真



TP.7調査坑設定状況

TP.7遺物出土状況

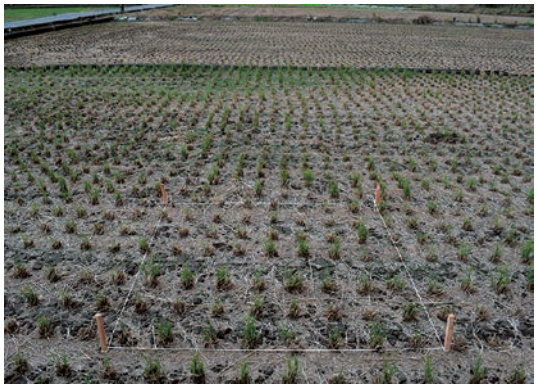
TP.7遺物出土状況（近景）

TP.7遺構検出状況

航空写真および範囲確認調査①

図版２

（北側調査区）



TP.8調査坑設定状況

TP.8遺構検出状況（東から撮影）

TP.8遺構検出状況（南から撮影）

TP.8土層堆積状況（東から撮影）

調査区設定

表土剥ぎ

遺構検出作業①

遺構検出作業②

範囲確認調査②および本調査①

P-1遺物出土状況

P-2検出状況

P-2半截①

P-2半截②

P-3・6検出状況

P-3半截

P-3遺物出土状況

P-6（右）半截

本調査②

図版４

（北側調査区）

P-3（左下）・6完掘

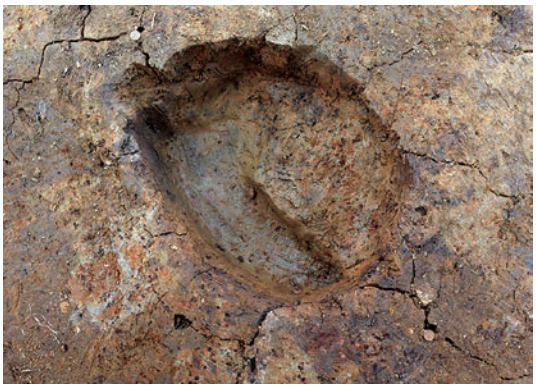
P-4（奥）・5（中）・7（手前）検出状況

P-4半截（調査区壁面にかかるため完掘とする）

P-5半截

P-5完掘

P-7半截



P-7完掘

SD-1検出状況

本調査③

SD-1半截

SD-1完掘

SD-2丸瓦出土状況

地山面出土遺物（灯明皿）

サブトレンチ1 東壁土層

サブトレンチ1 南壁土層

北側調査区 完掘（南東から）

北側調査区 完掘（北西から）

本調査④

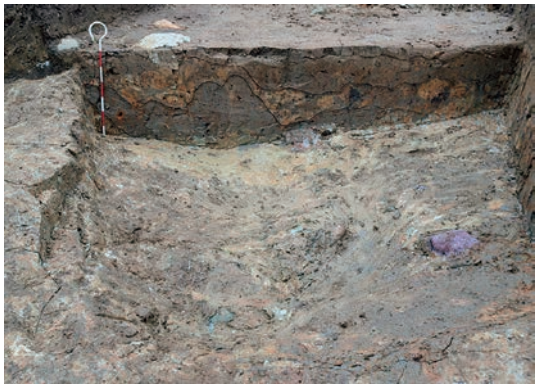
図版６

（南側調査区）

調査区設定

表土剥ぎ

遺構検出作業



SD-3半截

遺物出土状況（地山面）

北壁土層（南から撮影）

完掘（北から撮影）

完掘（南から撮影）

本調査⑤

1

2

3

4

5

6

7

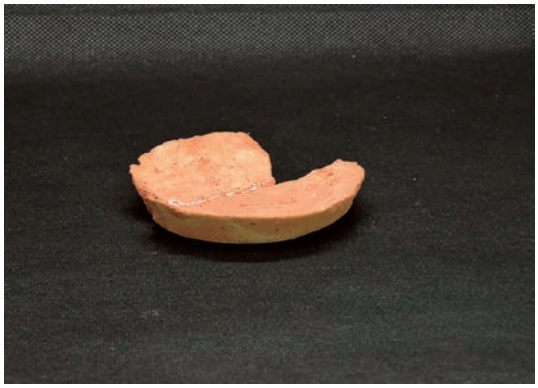
8

出土遺物①

図版８

（第12～13図）

9



10

11

12

13

14

15

16

出土遺物②

17

18

19

20

21

22

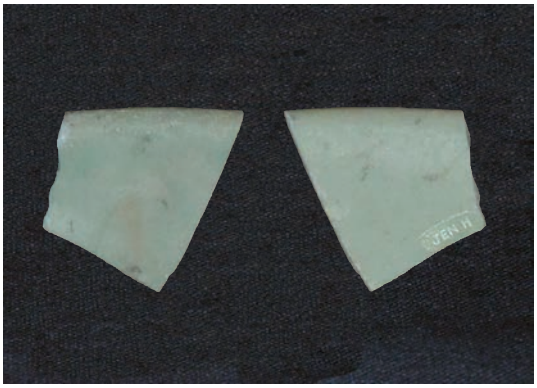
23

24

出土遺物③

図版10

（第15～17図）



25

26

27

28

29

30

出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	じょうこうじまええきにしがわいせき
書　　名	常光寺前駅西側遺跡
副 書 名	北岡地区農道整備工事に伴う発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	東　貴 之
編集機関	南島原市教育委員会
所 在 地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 ℡ 0957-73-6705
発行年月日	西暦2024年１月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
常光寺前駅(じょうこうじまええき) 西側遺跡(にしがわいせき)	南島原市(みなみしまばらし) 南有馬町(みなみありまちょう)	42214	028	32° 38′ 54″	130° 14′ 56″	20220516 ～ 20220608	60㎡	道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
常光寺前駅 西側遺跡	遺物包蔵地	中世	溝 ピット	土師器 須恵器 瓦質土器 陶磁器 瓦	

南島原市文化財調査報告書　第34集

常光寺前駅西側遺跡

2024. 1. 31

発行　長崎県南島原市教育委員会

〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　諫早印刷株式会社